

栄養教諭の職務実態と教職員・家庭・地域等の連携状況との関連について

木村 具子 (G180003)

指導教員：土田 満

キーワード：栄養教諭、職務、連携

はじめに

社会や家族のあり方の変化に伴い、子どもの肥満・痩身傾向の増加、体力・運動機能の二極化、朝食欠食等の課題が山積している。栄養教諭制度は、学校教育活動全体で食に関する指導を行い、子どもの望ましい食習慣の形成を促進するために誕生した。栄養管理だけでなく、教職員や家庭、地域との連携調整を行い、食育の推進が期待されているが、栄養教諭の配置規定は、栄養教諭制度創設以前と変わっていない。

先行研究では、栄養教諭誕生前の職務の実態調査と同様に、給食管理に多くの時間が費やされ、食に関する指導が思うように行えず、教職員や家庭地域との連携も進んでいない等の報告がなされている。

このような状況を踏まえ、栄養教諭が行う職務の実態と、中教審答申で掲げられた職務遂行の基盤となる教職員・家庭・地域等の連携との関連を明らかにすることを目的とした。

栄養教諭が行う連携に関する文献検討

「栄養教諭 and 連携」、「栄養教諭 and コーディネート」をキーワードに医中誌と CiNii で検索し、条件に合った 32 の論文を分析対象とした。内容を連携方法で 5 分類して検討した。多くの論文は家庭・地域や生産者、関係諸機関、教職員との連携や調整を指摘しているが、その具体的な方法までは言及していない。一方、その方法であるコーディネートの具体的な内容に関する論文は 2 件と少なかった。

栄養教諭の職務実態と連携に関するアンケート調査

1. 方法

1) 対象者及び調査方法

X市に勤務する栄養教諭 104 名を対象として、2019 年 7 月に研修会で調査票を配布した。

2) 調査内容

属性、職務遂行状況、満足度等、職務内容の重要性の認識、職務の実施、連携状況、自由記述は給食管理と

食指導の悩み、連携に必要な力、うまくいった事例

3) 分析方法

解析は IBM SPSS ver. 24 を用いた。自由記述は、KH Coder ver. 200f により計量テキスト分析を行った。

4) 倫理的配慮

個人情報守秘に関する説明を文書と口頭で行った。愛知みずほ大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

2. 結果

対象者の年齢は 41.7 ± 12 歳、経験年数 17.7 ± 13 年であった。また、調理方式は全て自校方式であった。

検討 1 職務遂行状況について

栄養教諭の調理場時間は平均 3.1 (1~7) 時間/日、給食事務時間は平均 3.5 時間 (1~8) /日であった。一方、食育授業回数は平均 27.6 回 (0~120) /年、給食の時間での指導回数は平均 45.5 回 (0~185) /年であった。

やりがい度は平均 3.5 点、満足度は平均 3.2 点で、時間充足感は平均 2.6 点とやや低めであった。

職務遂行状況と属性との関連は、年代別では、時間充足感は 20 歳代より 50 歳以上の方が有意に高かった。経験年数別では、経験年数 5 年以下の者より 11~25 年の者が給食事務にかかる時間が有意に長かった。

本務校の学級数では、時間充足感について 12~24 学級より 25 学級以上の者が充足感を感じていた。受持ちの食数では、食育授業の回数は 549 食以下より 550 食以上の方が年間の食育授業回数が有意に多かった。調理業務請負では、調理場にいる時間に有意差が認められ、直営より民間委託の方の時間が長かった。

自由記述については、勤務時間内で求められる職務ができない理由は、9 要素が出現し、要素 1 「多い」「時間」「仕事」「残業」等であった。給食管理における悩みは、6 要素が出現し、要素 1 「学校」「給食管理」「不安」「必要」「仕事」「人」「責任」「アレルギー」「悩む」等であった。食に関する指導における悩みは、11 要素が出現し、要素 1 「担任」「先生」「忙しい」「生徒」等

であった。給食管理の悩みと食に関する指導の悩みに出現する語には、強い関連性がないことが認められた。

検討2 職務の重要性の認識・職務の実施について

栄養教諭の職務内容の11項目で、職務の重要性の認識が職務の実施より有意に点数が高かった。有意差が認められなかった2項目は、校務分掌の項目であった。また、職務の重要性の認識と職務の実施では顕著な差がみられた項目は、「児童生徒に対する個別的な相談指導」、「保護者に対する個別指導」であった。

検討3 連携の状況について

連携の状況の総平均は3.78で、内訳は校内での連携の平均は3.93、地域との連携の平均は3.62であった。

連携の状況と属性との関連では、校内での連携1項目で経験年数に有意差が認められた。地域との連携に関する2項目と平均で、25以上の学級を受け持つ者の連携の点数が有意に低かった。地域との連携の2項目で、直営よりも民間委託の者で点数が有意に低かった。

自由記述の分析では、連携・調整をおこなうために必要だと考える能力や力については、9要素が出現し、要素1「コミュニケーション」「能力」等であった。連携・調整がうまくいった事例については、13要素が出現し、要素1「給食」「保護者」「児童」等であった。

検討4 連携の状況、職務遂行状況等との関連

連携の状況(3群)と職務遂行状況との関連では、やりがい感、満足度、時間充足感で、連携の状況の高値群の点数が有意に高かった。校内での連携では、食育授業回数、やりがい感、満足度、時間充足感で、地域との連携では、給食指導回数、やりがい感、満足度、時間充足感で、連携の状況の高値群の点数が高かった。

連携の状況(3群)と職務の重要性の認識との関連では、食の指導の2項目、校務分掌の4項目で、連携の状況の高値群の点数が有意に高かった。連携の状況(3群)と職務の実施との関連では、給食業務の2項目、食の指導の4項目、校務分掌の2項目、連携の項目で、連携の状況の高値群の点数が有意に高かった。

検討5 連携の状況と種々の要因との関連性

共分散構造分析の結果(図1)、校内での連携は、職務の重要性の認識と経験年数から影響を受け、やりがい感に影響を与えていた。地域との連携は、時間充足感からと、職務の重要性の認識から職務の実施を介して影響を受け、やりがい感に負の影響を与えるとともに、やりがい感からは正の影響を受けていた。

やりがい感、職務の重要性の認識、校内での連携から影響を受け、仕事満足度に影響を与えていた。

校内での連携と地域との連携には関連がなかった。

考察

職務遂行状況では、調理場にいる時間、給食事務時間などの給食管理に勤務時間の多くを割いていることが認められた。自由記述からも、給食業務に多くの時間がかかる悩みが抽出されている。給食管理にかかる時間が食育推進に影響している報告は従来から最近に至るまで続いており、栄養教諭の受け持ち学校数や、職員との事務作業の分担、学校管理職の理解不足等の改善が未だになされていないことが推察される。

職務の重要性の認識と実施の間に、多くの項目に乖離が認められた。栄養教諭における職務の重要性の認識はかなり高いが、給食管理等の忙しさが影響して実施が伴わない状況が生じている可能性が推察される。

連携の状況は属性との関連がほぼ無く、殆どの栄養教諭が凡そ同程度で連携を実施していた。自由記述では、給食管理では調理員との調整、食育指導では担任との調整等の具体的な悩みが抽出されており、連携状況の改善には、先行研究の指摘¹⁾も踏まえると、まず、悩みで抽出された関係性の調整から始めることが必要とされる。また、連携に必要な能力として、コミュニケーション能力、発信能力等が自由記述で挙げられており、これらの能力を高める機会も必要と考えられる。

一方、校内での連携に比べ地域との連携は実施されておらず、校内での連携と地域との連携の間には関連が認められなかったことから、地域との連携は校内での連携と比べて多くの要因が複雑に絡みあっていることが推察される。地域との連携を進めるには、内容と手法を整理してマニュアル化し、地域連携コーディネーターを置く等の体制づくりが喫緊の課題として求められる。また、連携については、養護教諭も同じ課題を抱えており、養護教諭との協働により、地域との連携が効果的に進む可能性が示唆される。

引用文献

- 1) 新保,他:日健教誌 第25巻 第1号,12-20,2017

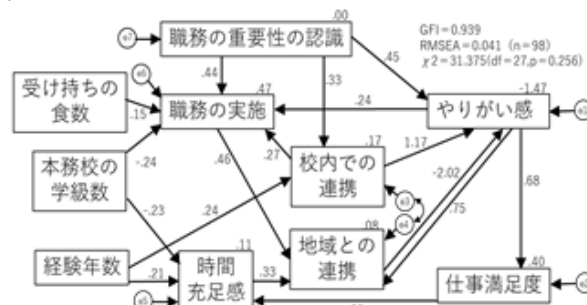


図1 連携の状況と種々の要因との関連性